

保育者および小学校教員養成校における音楽教員の演奏技術向上の方法についての一考察—研究会「クレ・ド・ソル」を例にして—

A Study of the Method to Improve Performance Technique for the Music Teachers in Nursery and Elementary School Teacher Training School — As an Example a Study Group ‘Clé de Sol’ —

奥田 尚子 中島 倍代 宮田 眞理 和田 宏一

OKUDA Naoko NAKAJIMA Masuyo MIYATA Mari WADA Hirokazu

キーワード:音楽, 音楽教育, 保育者養成, ピアノ, 技術向上, 演奏

Key Words: Music, Music Education, Nursery Teacher Training, Piano, Improve Technique, Performance

1. 本論の目的と先行研究

本論の目的は、保育者および小学校教員養成校（以下、養成校とする）における音楽教員の演奏技術向上のひとつの方法として行われている研究会の活動について再考し、養成校における音楽教員のスキルアップの方法論として提示することである。

養成校において「音楽」は必須科目であり、ピアノや歌唱（声楽）をはじめとして様々な音楽関連科目が設定されているが^{注1}、そのことは奈良佐保短期大学（以下、本学とする）においても同様である。ゆえに養成校における音楽教育に関する先行研究も多く、論文検索サイト CiNii（NII 学術情報ナビゲータ [サイニイ]）において「保育者養成 音楽」で検索すると 487 件^{注2}、「小学校教員養成 音楽」で検索すると 91 件表示される^{注3}。

しかし、これらの研究の多くは、授業における指導方法について論じられたもの、すなわち授業を受講する学生を研究の対象としたものであり、指導する側である教員自身の演奏技術の向上についての研究は少ない。このことについて、安田寛と長尾智絵は「関心はほとんど学生に向かっている。反対に、教員、つまり自分たちは関心の対象になっていない」¹⁾と述べ、中村紗和子も同様に「保育現場に求められる音楽の能力については、これまで様々な先行研究で明らかにされてきた。しかしながら、その研究の対象は多くの場合、保育者や学生に向けられており、保育者を指導する立場の教員に必要な音楽の能力についてまではあまり触れられていない」²⁾と指摘している。

保育者養成を主とする養成校において学生に要求されるピアノや歌唱の演奏技術は、音楽大学などのピアノ・声楽専攻の学生に要求されるほど高度な技術ではない。なぜならば、そもそも「音楽」の専門教育を受けていない学生が大半を占めるからであり、学ぶ内容が「音楽」に特化しないからである。すなわち養成校における「音楽」は、領域あるいは一分野でしかない^{注4}。しかし、高度な演奏技術を要しない作品であっても、単に楽譜に書かれている音を間違えずに演奏することだけに留まらず、幼児および児童をはじめ、聴いている人の心を捉える、いわゆる「音楽的な」演奏が出来るところまで指導されることが望まれる。そして、学生による音楽的な演奏の実現には、手本となる教員が自身の演奏技術を磨き、その学びにおいて得られた経験・知識を指導に活用することが重要であると考えられる。このことについて、奥千恵子が「こどもに適切な指導ができる保育者像を学生に求める前に、まず教員自らが、学生に対し音楽教育者の手本でありたい」³⁾と述べているように、養成校の音楽教員自身が演奏技術向上のための取り組みを行う必要があると筆者らは考えている。その方法として、一般的には、演奏会に出演する、リサイタルを行う、レッスンを受ける、公開講座に参加するなどが挙げられるが、いずれの方法も個人的な自己研鑽活動であり、これらについてまとめて論じることは難しい。

一方、本学においては「クレ・ド・ソル (Clé de Sol)」(以下、本会とする) という名称の

音楽研究会を設けており、会員である音楽教員がグループ活動を通して教員自身の演奏技術の向上を目指している。そして、本会の活動で得られた経験を、本学での音楽教育に生かしている。なお、本会のような研究会は、他の養成校にも存在している可能性はあるが、それについて論じた研究は全く見られない^{注5)}。そこで本論では、本会について概観し、これまでの活動について研究報告を行うとともに、今後も演奏研究活動を継続するにあたり、その存在意義を再考する。そして、それらの報告と考察により、養成校における音楽教員の演奏技術向上のひとつの方法論を提示する。

2. 研究会「クレ・ド・ソル」の発足および活動の概説

2-1 研究会の発足とその目的および現状

本会は、本学の音楽科目を担当する教員を主として構成されている研究会である。養成校のピアノ教育について考察した奥は、「学生が「望ましい保育者としてピアノが弾ける」ようになるためには、まず、ピアノ教員が保育における音楽の意味を十分に理解し、その上で、学生が卒業後に保育現場で真に役立つ実践力を身につけるための指導力を持たなければならない⁴⁾と述べている。すなわち、ピアノ教員が常に保育現場で役立つ実践力とはなにか、そのニーズを知り、応えるために自己研鑽する必要があるといえる。本会は、各々の会員の演奏技術を高めることにより、本学の音楽関連科目における教育力を向上させることを目的として活動を始めた。その後、本学の元音楽非常勤教員や外部の音楽家（現会員からの紹介）も会員として加わっている。なお、本会の名称「クレ・ド・ソル」とはフランス語で「ト音記号」の意味である。

続いて、研究会の発足とこれまでの経緯について述べる。本会は1978（昭和53）年5月、当時の音楽専任教員であった砂場美紀子の呼びかけにより発足した。設立時会員となったのは7名（砂場と音楽非常勤教員6名）であった。会員専門分野の内訳は、砂場を含め声楽家2名、ピアニスト3名、パイプオルガニスト1名、楽理研究者1名である。1980年代後半ごろには、外部から初の入会者を迎えている。なお、設立当初は主に各自の演奏に関する研究を行っていたが、作曲家の澤田博が本学音楽専任教員に就任し、本会に参加することにより、楽曲の構成や和声の分析など音楽学的なアプローチがなされ、研究の幅を拡げることとなった。現在の会員数は、現・音楽専任講師の多田純一をはじめ、音楽非常勤教員5名、元非常勤教員2名、外部の音楽家3名、計11名（2019年9月現在）である。

2-2 研究会の活動の概説

本会の活動は、(1)「本学学内における勉強会」と(2)「学外における演奏活動」で成り立っている。次に、それぞれの活動の主な内容を述べる。

(1) 本学学内における勉強会

本学の音楽教室を会場とする勉強会を設立当初から現在まで開催している。開催頻度は、設立当初から2000年度までは1～2ヶ月ごと、2001年度以降は年に4回程度である。勉強会では、最初に各自が演奏を披露し、その演奏に対する感想を率直に話し合い、各自の専門分野に関する意見交換を行う。意見交換の内容について具体的な例を以下に示す。

- ・その作品について各会員がどのようなイメージを持っているか
- ・作品の構造やモチーフはどのようになっているのか
- ・作品が作曲された時代背景
- ・作曲家の生涯の中でその作品はいかなる時期につくられたのか
- ・表現する際の身体の使い方（姿勢、腕の使い方、タッチ、発声法、言葉の発音など）は、どのように留意するのか
- ・各会員が独自に受けたレッスンおよび講習会などで得た知識
- ・演奏者の意図している音楽は聞き手に伝わっているのか
- ・もし、演奏者の意図する音楽が伝わっていないとすれば、どの様に表現すれば伝わるか

また、澤田が会員に加わった 1989 年度から 2000 年度までは、澤田による楽曲分析など音楽理論の講義なども行われた。以下にその講義内容の例を挙げる。

- ・授業で学生に伝えるべき音楽理論の復習
- ・こどもの歌の伴奏付けおよびアレンジの方法
- ・こどもの声の高さに合わせた移調法
- ・短いモチーフを用いた 8～12 小節程度の作曲，和声付け，移調などの実践

また、中村が述べているように、保育者養成校では「ピアノ演奏および弾き歌いについて短時間で効率よく、学生それぞれに合った指導をおこない、より多くのことを学ばせること」⁵⁾ が大切であるが、その方法として以下のような指導方法の共有も行っている。

- ・学生とのコミュニケーションをどのように取っているか
- ・指導する曲の難所をどのように克服させるか
- ・どのような指導や声かけが効果的であったか

以上のように、様々な意見交換を行うこと、それ自体が音楽表現の言語化であり、その会話そのものがピアノの個人レッスンに生かせるのである。

(2) 学外における演奏活動

学外における演奏活動としては「演奏会」と「ロビーコンサート」がある。

「演奏会」は、秋篠音楽堂ホールなどの演奏会用ホールにおいて開催している。本会は設立以来、長らく勉強会のみで開催であったが、設立者の砂場から「外部に向けて演奏を発信してはどうか」との提案がなされたため、1990 年 3 月、ならまちセンター・市民ホールに於いて「第 1 回演奏会」を開催し、以降、1 年半～3 年おきに開催している。会場は、第 2 回までは、ならまちセンター・市民ホール、第 3 回以降は秋篠音楽堂ホールである。なお、入場料は、一般入場者が第 1, 2 回は 1,000 円、第 3～11 回は 2,000 円、第 12 回は 1,500 円であり、学生（大学生以下）は全ての回において 500 円としている。

「ロビーコンサート」は、保育者となる学生および学生を指導する養成校の教員の視野を広げる目的で始めたもので、会場は主として秋篠音楽堂ロビーである。2006 年 12 月に「第 1 回ロビーコンサート」を開催し、以降、1～2 年おきに開催している。

以上、学外における演奏活動について概観したが、「演奏会」および「ロビーコンサート」についてのデータは文末の別表 1 および別表 2 に示した。なお、いずれの演奏会においても、プログラムには専用のロゴマークが使用されている。本会のロゴマーク（図 1）は、前述の第 1 回演奏会開催の際に、当時の本学美術専任教員であった戸田勉に作成を依頼し制作されたものである。現在まで継続して「演奏会」および「ロビーコンサート」のチラシやプログラムにて使用されている。



図 1 「クレ・ド・ソル」のロゴ

3. 「クレ・ド・ソル」の活動

3-1 「演奏会」についての考察

本節では「2-2 研究会の活動の概説」にて述べた「演奏会」と「ロビーコンサート」の具体的な演奏作品について、別表 1 「「クレ・ド・ソル」 学外における演奏活動一覧 (1) 演奏会」および別表 2 「「クレ・ド・ソル」 学外における演奏活動一覧 (2) ロビーコンサート」から、その演奏内容の傾向を考察する。

「演奏会」は 1990 年 3 月から 2014 年 4 月にかけて 12 回開催されており、客席数約 300 席のコンサート会場を使用し、有料で行われるクラシック音楽のコンサートである。各回の演奏会は、作品発表・テノール独唱・ソプラノ独唱・ピアノ独奏・ピアノ連弾もしくは 2 台のピアノによる二重奏で構成されており、第 2 回を除く他の 11 回のコンサートでは澤田の作品発表のため、作品に合わせて客演（ピアノ・声楽・弦楽器・管楽器・打楽器・合唱団）

を迎えている。各プログラムの演奏時間には柔軟性を確保しているため、曲集の全曲演奏やソナタ全楽章の演奏も可能である。

12回の演奏会の全プログラムを概観すると、声楽では中田喜直(1923-2000)の作品が32%と最も多く、こどものための作品として作曲されることが多い金子みすゞ(1903-1930)の詩による作品や、《六つの子供の歌》などが演奏されている。次に多いのが別宮貞雄(1922-2012)の作品で11%となっており、《淡彩抄》の全曲演奏などが行われている。続いて近代フランス音楽のクロード・ドビュッシー Claude Debussy (1862-1918)の作品が9%、ガブリエル・フォーレ Gabriel Fauré (1845-1924)の作品が6%となっている。以上により、声楽は日本人作曲家の作品と近代フランス音楽が多いという傾向がみられる。

ピアノ演奏においては、ロマン派の作品が多く演奏されており、54%と半数を上回っている。続いて近代フランス音楽の作品が24%演奏されている。作曲家別にみると、フリデリク・ショパン Fryderyk Chopin (1810-1849)の作品が最も多く、ピアノ演奏全体の25%を占め、《スケルツォ》、《バラード》、《ノクターン》、《ポロネーズ》、《ワルツ》、《エチュード》等の多岐にわたる幅広い作品が演奏されているところが特徴である。ショパンの次に演奏回数が多いのがドビュッシーの作品で20%となっており、《前奏曲集 第1集》、《映像 第1集》、《映像 第2集》などが演奏されている。その他では、アントニン・ドヴォルザーク Antonín Dvořák (1841-1904)の作品が8%、セルゲイ・ラフマニノフ Sergei Rachmaninov (1873-1943)、ピョートル・チャイコフスキー Peter Tchaikovsky (1840-1893)、モーリス・ラヴェル Maurice Ravel (1875-1937)の作品が6%と続く。ドヴォルザークの作品はピアノ連弾で演奏され、2台のピアノは管弦楽曲をピアノ二重奏に編曲したチャイコフスキーやラヴェルの作品が多く演奏されている。ピアノ作品では、ショパン、近代フランス音楽、ロシア音楽、が主な傾向であると言える。

なお、この「演奏会」は本学会員の日々の自己研鑽の発表の場ではあるが、プログラムについて、本学の学生が聴衆の中心者である事が考慮されている。また、よく知られている美しく抒情的なメロディを聴衆が追い、楽しめることも重要視されている。このことについて、演奏回数の多い作曲家の作品を通して考察すると、まず声楽の中田喜直の作品は、言葉のイントネーションに沿ったメロディ作りがされており、歌いやすく、聴きやすい。《めだかの学校》や《かわいいかくれんぼ》など、現在も保育現場においてよく用いられる作品が多いことから、中田の作品を広く知ることは、保育士を目指す本学の学生にとって有益なことであろう。また、ショパンは作曲家としての知名度も高く、その作品のほとんどをピアノ独奏曲が占めているため多く演奏されたと考える。さらに、声楽・ピアノの両方を通して多く演奏されているドビュッシー、ラヴェル、フォーレの作品は、ショパンの作品と同様に美しい旋律を持つ作品が多い。旋律と共に美しい和声が特徴的な近代フランス音楽に親しむことにより、保育現場における伴奏の工夫への意識付けが意図されている。

3-2 「ロビーコンサート」についての考察

「ロビーコンサート」は、2006年12月から2018年3月にかけて9回開催している。客席数60～70席の会場を使用し、入場無料のコンサートである。各回のプログラムはテノール独唱・ソプラノ独唱・ピアノ独奏・ピアノ連弾で構成されており、第9回ではヴァイオリン独奏の客演を迎えている。特色としては、毎回のコンサートにサブタイトルを付け、そのサブタイトルに沿った選曲を行い、コンサート全体に統一感や季節感を持たせていることと、作品の解説やエピソードを紹介することによって聴衆との距離を縮める工夫を行い、演奏時間も1つのプログラムあたり10分以内と「演奏会」とは異なり短い点が挙げられる。以上により、クラシック音楽のコンサートには足を運ばないような聴衆にも、聴きやすく、楽しめるようなプログラムとなっている。また、クラシック音楽の他、アニメーションの主題歌、ミュージカル作品、ジャズおよびアレンジされたポピュラー作品も演奏されており、クラシック音楽とポピュラー音楽の作品の割合は9:1である。

声楽の演奏は日本人作曲家の作品が多く、声楽演奏の48%が該当する。日本人作曲家の中で最も演奏回数の多いのは「演奏会」と同様に中田喜直の作品であり、次いで團伊玖磨

(1924-2001)の作品である。そして近代フランス音楽のラヴェル、フォーレ、ロマン派のヨハネス・ブラームス Johannes Brahms (1833-1897)の作品と続く。ピアノ演奏ではロマン派の占める割合が多く、ピアノ演奏全体の70%を占めている。ロマン派の中で一番多く演奏されているのは「演奏会」と同様にショパン作品であり、ローベルト・シューマン Robert Schumann (1810-1856)、フランツ・リスト Franz Liszt (1811-1886)と続くが、近代フランス音楽のドビュッシーも多く取り上げられている。一方、ピアノ連弾では、連弾用に編曲されたポピュラー曲を多く演奏している。聴きやすく楽しめるコンサートという観点から、知名度の高いショパンの作品や、歌詞の分かりやすい日本語の声楽曲が多く演奏されている点が「ロビーコンサート」のプログラムの傾向である。

3-3 「クレ・ド・ソル」の活動と本学の音楽関連科目および「おたまじゃくしコンサート」との関連性について

本節では、本会の演奏・研究活動が、本学音楽関連科目および「おたまじゃくしコンサート」(選抜された学生と教員による公開コンサート)における音楽実技指導の際、どのように反映されているかについて考察する。

本会に所属する本学音楽教員(以下、本学会員とする)^{注6)}の活動目的は「2. 研究会「クレ・ド・ソル」の発足および活動の概説」にて述べた通りである。また、「3-1 「演奏会」についての考察」および「3-2 「ロビーコンサート」についての考察」で明らかにした通り、主な演奏活動の場は「演奏会」と「ロビーコンサート」であるが、それに加えて本学会員は「おたまじゃくしコンサート」を学内における研究成果発表の場と捉えて出演しており、全43回のコンサート中37回で計137曲を演奏している。演奏回数は文末の別表3「「おたまじゃくしコンサート」作曲家別演奏回数」に示した。ピアノ曲全体の演奏回数は「演奏会」および「ロビーコンサート」と傾向は同様で、ロマン派の作品が多く取り上げられている。ピアノソロの演奏回数はショパンが最も多く、ドビュッシー、シューマンの順に続く。また、ピアノ連弾の演奏回数がソロの回数よりも多いという特徴がみられ、多様な音楽性に触れるとともに、教員の連弾は学生の連弾の手本となるように意図されていることが読み取れる。また、グレード課題曲のブルクミュラーはピアノ2台4手に編曲された様々な表現により、イメージが膨らみ演奏への興味が増すことがねらいである。声楽では日本人作曲家の演奏回数が多く、作曲家別では中田喜直の作品が最も多い。

本学の音楽実技科目「音楽Ⅰ」から「音楽Ⅳ」では、保育現場で必要とされる音楽実技を習得し、実践できる力に高めることを目的にピアノの個人レッスンを行うと共に、「音楽Ⅱ」と「保育(表現・音楽)」^{注7)}におけるクラス授業^{注8)}では、発声法を中心とした歌唱指導を行っている。学生のピアノ学習の経験状況を見ると、未経験あるいは導入期の学生が多い。その一方で幼少の頃からピアノを学び、難易度の高い曲に取り組む学生も在籍し、演奏技術の差が大きいため、指導にはグレード制を導入することで対応している。その学習成果の発表の場として、各科目の発表会と「おたまじゃくしコンサート」がある。

「おたまじゃくしコンサート」は、1977年11月から大学祭において毎年行われている。指導は音楽専任教員が音楽非常勤教員の協力を得て行っている。学生の希望が尊重されることから、クラシック作品の他、ポピュラー作品の演奏も行われ、ピアノだけでなく管弦楽器および声楽などでも出演可能である。別表3から「おたまじゃくしコンサート」において学生が取り組んだ作品を作曲家別で見ると、ショパンの作品が最も多く、次いで古典派のモーツァルトおよびベートーヴェン、近代フランス音楽のドビュッシーと続く。ショパンおよびドビュッシーの作品に取り組む学生が多いことは、「3-1 「演奏会」についての考察」で述べた、本会の「演奏会」における演奏作品と明らかな関連がみられる。また、ピアノ連弾およびポピュラー作品の演奏が行われることについても、「3-2 「ロビーコンサート」についての考察」で述べた「ロビーコンサート」における演奏作品と関連が深い。以上により、本学会員が勉強会および演奏活動によって得た知識と経験は、学生のピアノ演奏や歌唱など全ての音楽指導の場において、会員の教育力の礎になって生かされているといえる。

なお、今年度の「おたまじゃくしコンサート」においては、クラシック作品はピアノソロ

が7名、管楽器が1名で、ピアノソロを作曲家別でみるとショパン5名、ベートーヴェン、ドビュッシー各1名であった。ポピュラー作品は、ピアノ連弾6組、管楽器1名、ギターによる弾き歌い2名などであった^{注9)}。

続いて、本会での活動を通して教員自身が学んだことが、本学における音楽教育にどのように反映されているか、その具体的な内容について考察し、以下に示す。

(1) 選曲する際の援助の方法として

課題となる曲を学生が選択する際、教員が複数の曲を演奏することによって選曲を補助する。また、同じ作品においても様々な表現方法を提示することで表現のための演奏技術を提供する。それによって、学生は自身が好ましいと感じる曲および自身の技術レベルに合った曲を選ぶことが可能になる。教員の演奏を聴くことによって音楽への理解が深まり、作品そのものや演奏することへの興味が増す。

(2) 練習方法および音楽表現について

曲想や弾き方のイメージを掴ませるために、合理的な弾き方や効果的な練習方法を示す。それによってスムーズな学習が可能になる。学生が躓きやすいと思われる箇所は、教員側も経験から把握しているため、教員が最初に合理的な弾き方を示すことで、躓きを回避することができる。

(3) 高度な演奏技術を要する芸術性の高い作品への助言

ショパンやドビュッシーのような、高度な演奏技術と芸術的な音楽表現が要求される作品の場合、作品の構造および背景、作曲家について理解させるために、教員自身が演奏する際に得た知見を生かして説明する。同時に、その作品および同じ作曲家の他の作品を教員が演奏し、聴かせることも重要である。教員の演奏によって、曲全体の雰囲気、音楽の方向性、フレーズ間の取り方や息づかい、具体的な表現方法、和音の豊かな響きの変化および繊細なニュアンスなどが学生に伝わり、曲の完成度が高まる。

(4) 演奏技術の改善と向上にむけて学びの支援のために

演奏における手・指・腕などの関節および筋肉の細かな使い方について、教員が演奏しながら自身の手と身体で学生に示す。このことにより、学生のピアノ演奏技術が磨かれ、高度な表現が可能になる。また、ピアノに苦手意識を持つ学生に多く見られる身体の硬さに対しては、身体の使い方についての適切な助言が必要であり、学生個人の努力だけで改善することは難しい。身体の硬さを放置した場合、音符を正しく追うことだけに捉われ、身体の動きおよび音楽の流れがぎこちなくなる場合が多い。適切な身体の使い方について留意することは、保育者として音楽的な演奏をするための技術の向上に繋がる。

(5) 学びの支援のために

教員自身が本会での演奏活動の際に直面する技術的および精神的な不振、不調について、対処を行い、克服した経験を生かし、全ての学生が自信を持ち、楽しみつつ音楽を表現できるよう学びの支援を行う。また、個々の学生が抱える、学習の妨げとなり得る様々な状況にも配慮する。学生がピアノの学習に躓き、意欲を失い戸惑っている場面においては、学生に寄り添った精神的サポートを行う。

上記に示した考察は、「2-2 (1) 本学学内における勉強会」に具体例として挙げた、意見交換による言語化が、教育内容に反映していることを示している。本学会員は「演奏家」と「教育者」という二つの立場を持っており、会員同士が意見交換を行い、相手の個性を尊重することにより築き上げた信頼関係は、本会の活動の原動力となっている。本節において述べた、本会での活動を生かしての教育方法は、本学の音楽教育の一翼を担うものであり、本会における演奏・研究活動と、本学における音楽関連科目、「おたまじゃくしコンサート」のための個人レッスンは、密接に関連していると考えられることができる。

4. まとめ

本論の目的は、本学における音楽教員の演奏技術向上の一つの方法として行われている

研究会である「クレ・ド・ソル」について再考し、養成校における音楽教員のスキルアップの方法論として提示することであった。

前項「3-3 「クレ・ド・ソル」の活動と本学の音楽関連科目および「おたまじゃくしコンサート」との関連性について」で述べたように、音楽教員が本会の演奏・研究活動を通して自身の演奏技術を向上させることは、指導の際に、よりの確なアドバイスおよび個々の学生に応じた配慮を行うことが出来るという利点がまず挙げられる。次に、技術的・表現的により上質な演奏を聴かせ、演奏している姿を見せることは、学生が教員の演奏から芸術的な表現の方法および的確な身体の使い方を感じ取り、そのことによって学生の演奏の質を向上させることが出来るようになる利点もある。また、これらの利点により、音楽が本来持っている楽しさを学生に感じさせることを可能としている。

以上により、本会における演奏・研究活動は本学の音楽教育の質の向上に役立っているといえ、指導する上で重要な要素の一つであると結論づけることができる。

なお、本論で挙げた本会の活動は、他の養成校において同様の取り組みが行われている場合、その取り組みを再検討するモデルケースとなり得るため、本論はその先駆的役割を果たしているともいえる。

最後に、今後も本会の活動を継続することにより、保育者および小学校教員を目指す者へのさらなる音楽表現力の向上に貢献できるよう努めることを指針として挙げ、本論の締めとする。

注釈

注1) ただし、養成校によって音楽系カリキュラムに対する手厚さは異なっており、多種の音楽科目を設定している機関もあれば各免許取得のための最低限の音楽科目のみ設定している機関もある。また、ピアノ実技および声楽実技の授業は「音楽Ⅰ」「音楽演習」など、内容を直接表さない科目名が付けられているケースが多いことを付記しておく。

注2) 国立情報学研究所：「CiNii Articles - 日本の論文をさがす」「保育者養成 音楽」,
<https://ci.nii.ac.jp/search?q=%E4%BF%9D%E8%82%B2%E8%80%85%E9%A4%8A%E6%88%90%E3%80%80%E9%9F%B3%E6%A5%BD&range=0&count=20&sortorder=1&type=0>
 (2019.11.13)

注3) 注2)と同様、「小学校教員養成 音楽」,
<https://ci.nii.ac.jp/search?q=%E5%B0%8F%E5%AD%A6%E6%A0%A1%E6%95%99%E5%93%A1%E9%A4%8A%E6%88%90%E3%80%80%E9%9F%B3%E6%A5%BD&range=0&count=20&sortorder=1&type=0> (2019.11.13)

注4) ただし、国立大学法人の教員養成校では事情が異なっており、それぞれの分野や領域に応じて専門的なアプローチにより教育が行われるため、音楽教育を主とするコースや学科では、高度な演奏技術が求められる場合が多い。

注5) 注2)と同様、2019年11月13日時点で、CiNiiにおいて「ピアノ 教員 技術向上」「音楽 教員 技術向上」「声楽 教員 技術向上」「保育者養成 教員 技術向上」「保育者養成 教員 自己研鑽」「音楽 教員 自己研鑽」「ピアノ 教員 自己研鑽」「声楽 教員 自己研鑽」「音楽 教員 スキルアップ」「保育者養成 教員 スキルアップ」「保育者養成 教員 研究会」、以上11パターンで検索を試みた。うち5パターンである「ピアノ 教員 技術向上」で1件、「音楽 教員 技術向上」で2件、「音楽 教員 自己研鑽」で1件、「音楽 教員 スキルアップ」で2件、「保育者養成 教員 研究会」で5件、それぞれ表示されたが、いずれも音楽教員による研究会について論じられたものではない。また、他の6パターンでは0件であった。

注6) 本会への参加はあくまで任意であり、本学の全ての音楽教員が必ずしも本会に所属しているわけではない。

注7) 2019年度入学生から「保育内容（表現・音楽）」として実施される。

注8) 学生はクラス授業、フォロー・アップ、ピアノ個人レッスンの3ヶ所を移動する。

注9) 2019年の「おたまじゃくしコンサート」では、声楽の演奏は行われていない。

引用・参考文献

- 1) 安田寛, 長尾智絵: 「「保育におけるピアノの流行」と保育者養成機関ピアノ教員の関心の在り方との関係について」, 『奈良教育大学紀要』人文・社会科学, 59 (1), p.168 (2010)
- 2) 中村紗和子: 「保育者養成校におけるピアノ指導に関する一考察: 「音楽の要素」「演奏の技能」を観点に指導方法の比較を通して」, 『九州女子大学紀要』, 51 (2), p.89 (2015)
- 3) 奥千恵子: 「保育者養成と演奏技法: 保育指導としてのピアノ奏法」, 『四天王寺大学紀要』, 48, p.145 (2009)
- 4) 3) と同稿, p.137
- 5) 2) と同稿, p.92

別表1 「クレ・ド・ソル」 学外における演奏活動一覧 (1) 演奏会

回	日時	会場	スタイル	出演者	作曲者および演奏回数
1	1990年 3月10日(土)	*ならまち センター	ピアノ独奏	中島倍代	ショパン 1
			ソプラノ独唱	平方充子 (吉田和代)	中田喜直 2、ブッチーニ 1
			ピアノ独奏	前田裕子	ラフマニノフ 2
			ソプラノ独唱	加藤容子 (奥田尚子)	ブッチーニ 1、チェステイ 1、レスピーギ 1
			ピアノ連弾	山下玲子、吉田和代	ラフマニノフ 3
			テノール独唱 (作品発表)	*福田清美 (澤田博)	澤田博 7
			ピアノ独奏	本間晶子	ブラームス 3
			ソプラノ独唱	砂場美紀子 (澤田博)	アーン 4
2	1991年 10月1日(火)	*ならまち センター	ピアノ独奏	山下玲子	ショパン 2
			ソプラノ独唱	平方充子 (中島倍代)	小松耕輔 1、山田耕柝 1、ロッシーニ 1、 チレア 1
			ピアノ独奏	奥田尚子	ショパン 1
			ピアノ独奏	吉田和代	ショパン 2
			ソプラノ二重唱 (作品発表)	加藤容子、砂場美紀子 (澤田博)	澤田博 3
			ピアノ連弾	前田裕子、本間晶子	ドヴォルザーク 5
3	1993年 6月12日(土)	秋篠音楽堂 ホール	ピアノ連弾	山下玲子、中島倍代	ガーシュウィン 1
			ピアノ独奏	奥田尚子	ショパン 1
			オーボエ独奏 (作品発表)	*全良雄 (澤田博)	澤田博 1
			ピアノ独奏	前田裕子	ショパン 1
			二重唱	*青木耕平、平方充子 (吉田和代)	中田喜直 11
4	1994年 10月30日(日)	秋篠音楽堂 ホール	ピアノ独奏	本間晶子	フォーレ 1
			ソプラノ独唱	平方充子 (奥田尚子)	中田喜直 6
			ピアノ独奏	中島倍代	メンデルスゾーン 1
			フルート独奏 (作品発表)	*中川恵子 (澤田博)	澤田博 1
			ソプラノ独唱	砂場美紀子 (奥田尚子)	別宮貞雄 10
			ピアノ二重奏	吉田和代、山下玲子	チャイコフスキー 5
5	1996年 6月8日(土)	秋篠音楽堂 ホール	ピアノ独奏	前田裕子	リスト 1、ショパン 1
			ソプラノ独唱	砂場美紀子 (奥田尚子)	ラヴェル 5
			ピアノ連弾 (作品発表)	*相場緑、澤田博	澤田博 5
			ピアノ二重奏	吉田和代、本間晶子	三善晃編曲 5 (岡野貞一 2、文部省唱歌 2、草川信 1)
			ピアノ二重奏	山下玲子、中島倍代	モーツァルト 1
6	1998年 6月20日(土)	秋篠音楽堂 ホール	ピアノ独奏	本多玲子	ヒナステラ 3
			ソプラノ独唱	平方充子 (本多玲子)	サンダース 1、フィリベルト 1、モレス 1
			チェロ独奏	*左納実子 (吉田和代)	プロットホ 1、ポツパー 1
			ピアノ独奏	奥田尚子	ドビュッシー 3
			チェロ独奏(作品 発表)	*左納実子 (澤田博)	澤田博 1
			ピアノ独奏	中島倍代	ベートーヴェン 1
7	2001年 6月16日(土)	秋篠音楽堂 ホール	ピアノ独奏	前田裕子	ショパン 1
			ソプラノ独唱	平方充子 (中島倍代)	シューベルト 3
			ピアノ独奏	本多玲子	ドビュッシー 2
			マリンバ独奏(作 品発表)	*尾田敬子 (澤田博)	澤田博 1
			ピアノ独奏	奥田尚子	ドビュッシー 5
			ピアノ二重奏	山下玲子、中島倍代	ミヨー 1

回	日時	会場	スタイル	出演者	作曲家および演奏回数
8	2004年 10月11日 (月祝)	秋篠音楽堂 ホール	ピアノ独奏	中島倍代	プロコフィエフ1、ショパン1
			ソプラノ独唱	平方充子(宮田眞理)	中田喜直 5、川口耕平 1
			ピアノ独奏	前田裕子	ショパン1
			コントラバス独奏 (作品発表)	*古味寛康(澤田博)	澤田博 1
			テノール独唱	和田宏一(本多玲子)	ドビュッシー5
			ピアノ独奏	奥田尚子	ラヴェル 3
			ピアノ二重奏	宮田眞理、小澤裕子	ドビュッシー1、デュカ1
9	2008年 1月27日(日)	秋篠音楽堂 ホール	ピアノ独奏	前田裕子	ショパン 2
			ソプラノ独唱	平方充子(奥田尚子)	大中恩 2、R.シュトラウス 3
			ピアノ独奏	中島倍代	J.S.バッハ 1
			ヴァイオリン独奏 (作品発表)	*納庄麻里子(澤田博)	澤田博 1
			テノール独唱	和田宏一(奥田尚子)	ドビュッシー3、山田耕作 2
			ピアノ二重奏	宮田眞理、小澤裕子	ラヴェル 1
10	2010年 5月16日(日)	秋篠音楽堂 ホール	ソプラノ独唱	平方充子(本多玲子)	團伊玖磨 2、清水侑 1、中田喜直 1
			ピアノ独奏	前田裕子	ショパン 1
			ソプラノ独唱 (作品発表)	*門田泰子(澤田博)	澤田博 3
			ピアノ独奏	奥田尚子	ドビュッシー2
			ピアノ連弾	宮田眞理、小澤裕子	ドヴォルザーク 2、スメタナ 1
			テノール独唱	和田宏一(*北谷千智)	フォーレ 2、團伊玖磨 1、中田喜直 2
			ピアノ独奏	中島倍代	リスト 2
11	2013年 3月31日(日)	秋篠音楽堂 ホール	ピアノ独奏	中島倍代	ショパン 4
			テノール独唱	和田宏一(*大谷祥子)	モーツァルト 2、中田喜直 2、別宮貞雄 1
			トランペット独奏 (作品発表)	*黒岩洋輔(澤田博)	澤田博 1
			ソプラノ独唱	平方充子(堀田淳子)	木下牧子 2、貴志康一 1、中田喜直 1、 南安雄 1
			ピアノ独奏	奥田尚子	ドビュッシー1、ラヴェル 1
			ヴァイオリン独奏	*串田えがく(本多玲子)	ベートーヴェン 1
12	2014年 4月18日(土)	秋篠音楽堂 ホール	ピアノ独奏	奥田尚子	ドビュッシー3
			ソプラノ独唱	平方充子(*服部さやか)	マルティニー 1、スカルラッティ 1、 ヘンデル 1
			ピアノ独奏	中島倍代	ショパン 2
			テノール独唱	和田宏一(*服部さやか)	フォーレ 4
			メソソプラノ独唱 (作品発表)	*児玉祐子(澤田博)	澤田博 4
			合唱(作品発表)	*るるくけいはんな (*佐々木千壽)	澤田博 3、見岳章 1
			重唱(作品発表)	平方充子、和田宏一(*服部さやか)	澤田博 3
			ピアノ二重奏	宮田眞理、小澤裕子	J.S.バッハ 1

※曲数の数え方：ソナタ・ソナチネおよび組曲は、一部の楽章のみの演奏でも全楽章演奏しても1回として数えた。
 なお、曲集については、実際に演奏した曲数をそのまま回数として数えている。
 会場の正式名称：ならまちセンター → ならまちセンター・市民ホール
 出演者の項：*印=客演、() =伴奏者を示す
 (作成：中島倍代、奥田尚子、和田宏一)

別表2 「クレ・ド・ソル」 学外における演奏活動一覧(2) ロビーコンサート

回	日時	会場	スタイル	出演者	作曲家および演奏回数
1	2006年 12月11日(月)	秋篠音楽堂 ロビー	テノール独唱	和田宏一(奥田尚子)	モーツァルト 2、フォーレ 3、文部省唱歌 1、多忠亮 1、 中田喜直 1、バーリン 1
			ピアノ独奏	宮田眞理	ショパン 1
			ピアノ独奏	奥田尚子	ドビュッシー2
			ピアノ独奏	小澤裕子	ラフマニノフ 2
			ピアノ連弾	宮田眞理、小澤裕子	ドヴォルザーク 3
2	2007年 8月6日(月)	秋篠音楽堂 ロビー	ピアノ独奏	前田裕子	ショパン 1
			ピアノ独奏	小澤裕子	ヒナステラ 3
			ソプラノ独唱	平方充子(*大谷祥子)	マルティニー 1、スカルラッティ 1、ドナウディ 1
			テノール独唱	和田宏一(*大谷祥子)	フォーレ 3、團伊玖磨 2
			ピアノ独奏	奥田尚子	フォーレ 1
			ピアノ独奏	中島倍代	レハール 1
			ピアノ独奏	宮田眞理	シューマン 7

回	日時	会場	スタイル	出演者	作曲者および演奏回数
3	2008年 8月9日(土)	*JEUZIA 梅田	ピアノ独奏	前田裕子	ドビュッシー1
			テノール独唱	和田宏一(奥田尚子)	ラヴェル5
			ピアノ連弾	宮田眞理、小澤裕子	ブラームス3
			ピアノ独奏	中島倍代	平井康三郎1、アイルランド民謡1
			ソプラノ独唱	平方充子(宮田眞理)	フォスター1、カッチーニ1、アイルランド民謡1
4	2009年 8月19日(水)	秋篠音楽堂 ロビー	ピアノ独奏	宮田眞理	リスト1
			テノール独唱	和田宏一(奥田尚子)	ブーランク3
			ピアノ独奏	中島倍代	アルビノーニ1、大野雄二1
			ソプラノ独唱	平方充子(和田宏一)	マスカーニ2
			ピアノ連弾	和田宏一、大藪真紀子	ハチャトゥリアン1、久石譲1
			ピアノ独奏	奥田尚子	ドビュッシー2
			ピアノ独奏	小澤裕子	シベリウス1
			テノール独唱	和田宏一(奥田尚子)	團伊玖磨2
			ソプラノ独唱	平方充子(奥田尚子)	弘田龍太郎1、越谷達之助1
			ピアノ独奏	前田裕子	ショパン2
5	2011年 8月17日(水)	秋篠音楽堂 ロビー	ピアノ独奏	中島倍代	エルガー2
			ピアノ連弾	奥田尚子、和田宏一	成田為三1、文部省唱歌1、コンパース1
			ソプラノ独唱	平方充子(本多玲子)	R.ロジャース1、A.L.ウェバー1、F.ロウ1
			ピアノ独奏	奥田尚子	ドビュッシー1、リスト1
			テノール独唱	和田宏一(奥田尚子)	越谷達之助1、服部良一1、武満徹2
			ピアノ連弾	宮田眞理、小澤裕子	ピアソラ3
6	2012年 8月10日(金)	秋篠音楽堂 ロビー	ピアノ独奏	前田裕子	リスト1
			ソプラノ独唱	平方充子(本多玲子)	トスティ1、大中真二1、若松歎1、レハール1
			ピアノ独奏	中島倍代	ショパン3
			テノール独唱	和田宏一(奥田尚子)	フォーレ1、シャミナード1、シャブリエ1
			ピアノ独奏	奥田尚子	シャブリエ1
			ピアノ独奏	小澤裕子	ショパン1
			ピアノ独奏	宮田眞理	メトネル1
			ピアノ連弾	宮田眞理、小澤裕子	ベートルズ1、コズマ1、ガーシュイン1
			二重唱	平方充子、和田宏一(本多玲子)	中田喜直1、メドレー(小山作之助1、文部省唱歌1、海沼貫1、室崎琴月1)
			7	2014年 8月20日(水)	秋篠音楽堂 ロビー
ソプラノ独唱	平方充子(本多玲子)	高木東六1 平井康三郎1 中田喜直1			
テノール独唱	和田宏一(*服部さやか)	山田耕筰2			
ピアノ独奏	宮田眞理	シューベルト1			
ピアノ独奏	小澤裕子	グリーグ1			
ピアノ連弾	宮田眞理、小澤裕子	ラヴェル1			
ピアノ独奏	中島倍代	モーツァルト1、ヴェルディ1、マスカーニ1、プッチーニ3			
ソプラノ独唱	平方充子(本多玲子)	ブラームス1、モーツァルト1			
ピアノ独奏	奥田尚子	ブーランク2			
テノール独唱	和田宏一(*服部さやか)	ドリーブ1、ベルリオーズ1、ビゼー1			
8	2016年 3月23日(水)	秋篠音楽堂 ロビー	ピアノ連弾	宮田眞理、中島倍代	滝廉太郎1
			ピアノ独奏	本多玲子	グリーグ1、メンデルスゾーン1
			テノール独唱	和田宏一(服部さやか)	ブラームス2、滝廉太郎1、中田喜直1
			ピアノ独奏	奥田尚子	ショパン3
			ピアノ連弾	宮田眞理、中島倍代	グリーグ1
			ピアノ独奏	中島倍代	ハチャトゥリアン1、モンティ1
			ピアノ独奏	前田裕子	ショパン1
			ソプラノ独唱	平方充子(奥田尚子)	團伊玖磨2、中田喜直1
			ピアノ独奏	宮田眞理	シベリウス1、チャイコフスキー1
			ピアノ連弾	服部さやか、和田宏一	チャイコフスキー1
9	2018年 3月14日(水)	秋篠音楽堂 ロビー	ピアノ連弾	服部さやか、和田宏一	エルガー1
			ピアノ独奏	前田裕子	ショパン1
			ソプラノ独唱	平方充子(宮田眞理)	木下牧子1、草川信1、日本古謡1、シューベルト1、ブラームス1、モーツァルト1
			ピアノ独奏	中島倍代	ワーグナー1
			ピアノ独奏	服部さやか	リスト1
			ピアノ独奏	宮田眞理	シューマン1、シューベルト1
			テノール独唱	和田宏一(服部さやか)	マルティニーニ1、パッサーニ1、中田喜直3
ヴァイオリン独奏	*外蘭美穂(本多玲子)	J.ゲーテ1、ギヤニオン2、ピアソラ1			

※曲数の数え方：ソナタ・ソナチネおよび組曲は、一部の楽章のみの演奏でも全楽章演奏しても1回として数えた。
 なお、曲集については、実際に演奏した曲数をそのまま回数として数えている。
 会場の正式名称：JEUZIA 梅田 → JEUZIA 梅田ハービス ENT 店・ピアノサロン
 出演者の項：*印=客演、() =伴奏者を示す (作成：奥田尚子、宮田眞理、和田宏一)

別表3 「おたまじゃくしコンサート」作曲家別演奏回数

		教員演奏				学生演奏※1			
		ピアノソロ	ピアノ連弾	声楽	計	ピアノソロ※2	ピアノ連弾	声楽	計
バロック以前	バッハ	0	0	0	0	1	0	0	1
	イタリア歌曲	0	0	0	0	0	0	14	14
古典派	ベートーヴェン	3	0	0	3	19	0	1	20
	モーツァルト	0	1	1	2	18	2	1	21
ロマン派	ショパン	8	0	0	8	64	0	0	64
	シューマン	4	0	1	5	5	0	0	5
	ブラームス	2	12	0	14	2	2	1	5
	リスト	2	0	0	2	0	0	0	0
	シューベルト	1	0	2	3	4	0	1	5
	ブルクミュラー	0	11※3	0	11	0	0	0	0
	グリーゲ	0	3	0	3	0	1	0	1
	J.シュトラウス	0	2	0	2	0	0	0	0
	メンデルスゾーン	0	0	0	0	8	0	0	8
その他	0	0	2	2	0	2	0	2	
近代フランス音楽	ドビュッシー	5	6	0	11	11	2	0	13
	フォーレ	0	4	2	6	0	0	0	0
	その他	1	0	0	1	0	2	0	2
ロシア音楽	ラフマニノフ	1	3	0	4	0	0	0	0
	アレンスキー	0	4	0	4	0	0	0	0
	チャイコフスキー	0	3	0	3	0	0	0	0
上記に分類できない海外の音楽	外国民謡	1	0	1	2	0	0	7	7
	ガーシュイン	0	3	0	3	0	0	0	0
	ナザレー	0	2	0	2	0	0	0	0
	その他	0	3	0	3	0	1	0	1
日本人作曲家	中田喜直	2	4	14	20	0	0	6	6
	湯山昭	2	0	1	3	4	0	1	5
	平井康三郎	1	0	1	2	0	0	3	3
	澤田博	0	0	3	3	0	0	0	0
	武満徹	0	0	2	2	0	0	0	0
	その他	1	1	1	3	0	0	3	3
ポピュラー作品		3	4	3	10	0	32	7	39
計		37	66	34	137	136	44	45	225

※1 学生ソロは難易度の高い曲の演奏回数のみ抽出した(『ソナチネ・アルバム』修了程度)。

※2 第25～31回は資料が現存していないため、学生演奏回数に含めていない。

但し、教員の演奏については聞き取り調査を実施し、表に反映させた。

※3 『2台のピアノのためのブルクミュラー(1)(2)』伴奏:アルフレッド・パトラー／編著:たなかすみこ

※4 演奏回数がごくわずかな作曲家については各カテゴリーにおいて「その他」としてまとめた。

※5 作曲家の並び順は「教員演奏・ピアノソロ」の回数の多い順とし、回数が0または同数の場合は「教員演奏・ピアノ連弾」の多い順とした。

(作成:奥田尚子、和田宏一)